九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

獨逸浪漫主義の諸問題(一)

小牧, 健夫

https://doi.org/10.15017/2556574

出版情報:文學研究. 30, pp.65-80, 1941-12-25. 九州文學會

バージョン: 権利関係:

獨逸浪漫主義の諸問題(二

小 牧 健 夫

初期浪漫主義に於ける自然詩(Naturpoesie)の概念について

明確に規定してゐる場合がない。ただF・シュレーゲルの『文藝對話』に比較的精しく、これについての解釋が見ら れるのであるから、今てれを手がかりとして「自然詩」がいかに浪漫主義の文學論に於て理解されてゐたか、またそ リードリヒ・シュレーゲルやノヴーリスの言表にも往々異なつた意義に用ひられてゐるのを見る。 その上この概念を とでいかなる位置を與へられてゐるかを明かにして行かうと思ふ。 自然詩(Naturpoesie)の語は初期浪漫派の述作中に屢々見出されるのであるが、必しもそれは一義的でなく、フ・

誌上に掲載されたものであるが、浪漫主義の文學論を窺ふのに最上の資料として、研究家の肝膽を碎く檢討 の對象となつてゐる。この作品は四篇の纏まつた小論文を中に含んで、數名の人物が活潑に文學に就いて意 フリードリヒ・シュレーゲルの『文藝動話』("Gespräch über die Poesie")は一八〇〇年『アテネーウム』

逸浪漫主義の諮問題

獨

六五 (三六三七

見を應酬することになつてゐて、論文といふのも質は座中の一人が朗讀したやうに扱はれてゐる。 場する人物の マッヘルであるとの説はこの場合深く穿鑿する要はないであらう。 Andrea がF ・シュレーゲルであり、Ludovico がショリングであり、 Antonio がシュライエ ここに登

式の種々相に闘する試論』の四篇であることは周知の通りである。ところで、一般にはこの論文となつてる 關する見解が片言の裡に、見落せない重さをもつて、

示されてゐるのである。 る部分のみが重要視されて、枠をなしてゐる會話の部分は比較的閑却されてゐるが、そこにも著者の文藝に (Naturpoesie) については、 この論文が『文學の諮時代』、『神話論』、『小説に就いての書簡』、『ゲーテの初期、後期の作品に於ける様 緒言に當る箇所に注目すべき發言をしてゐるのである。 ここに扱はうとする自然詩

poesieのいかなるものであるかを半ば以上解明すると言つてよいくらるなのである。 (Naturdichtung) (Dichtung, Gedicht) これを讀んで第一に吾々が識り得ることは、ここに言はれる「自然詩」の場合の詩(Poesie) と混同してはならない。この兩者の意味の差異を明かにすることが、 とは殊別さるべき概念であるといふことである。從つてまた、 この自然詩は後にいふ自然詩 既にシュレーゲルの は制作された詩藝術

F, シュレーゲルは上述の對話篇冒頭の部分に次のやうな言葉を語つてゐる。

60 青春の盛りに閃めき、 (形なき、 意識なき Poesie)こそ太初の、根源的な詩であつて、これなくしては、言語の詩は決して生じなかつた (詩の形態を具へ、詩と呼ばれるもの)は、 戀する女の胸に燃える、 形なき、 意識なき Poesie に比すれば何物でもない。 草木のうちに動き、光として輝き、 子供にあつて微笑

て形成された一の形成物であるが、シュレーゲルは形なき Poesie と言つてゐる。それは詩人の構想作用とか表現活動 遍ねく行きわたつてゐるものであり、吾々をはなれて存在するものである。 とかにかかはるところのない「草木のうちに動き」」「子供に於てほほゑむ」ものなのである。それは無盡歳に世界に てこで自然詩を言語藝術である詩と區別してゐることは明白である。

普通に詩と呼ばれるものは、言語を要素とし

區別を明かにしておかなくてはならない。 この自然詩の普通の詩との關係はそれではどうなるであらうか。 それを見る前に先づ前述の Naturdichtung との

張は簡約すれば次のごとくである。 間に残る古き歌謡の價値を闡明して、獨逸の文藝思想史に劃期的な業績を残したのであるが、彼の自然文學尊重の主 しく排斥された Kulturdichtung の概念に對置されてゐる。 周知のごとくヘルデルは古代民族に傳承された傳說、民 Naturdichtung の概念は主としてヘルデルによつて、充實した、勝義の内容を有つに至つたもので、彼によつて烈

は便宜上コルフ(Korff: Geist der Goethezeit)のやうに、兩者を異なる意味を有たせて使用した。 ともに「自然詩」の語が見えてゐる。シュレーゲルは「ミニョン、シュペラータ、アウグスチーノー等は 因みにゲーテの『ギルヘルム・マイステル』についてF・ショレーゲルとノヴーリスとの評言のいづれにも Naturpoesie は普通は Naturdichtung と同義に用ひられる。(Ggs. Kunstpoesie.) (もさうである。) ここで

獨

(の人物)自然詩の神聖な一族で、全體に浪漫的な魅力と音樂を與へてゐる」(『ゲーテのマイス)と言ひ

言つてゐる。シュレーゲルのこの場合は、本來の、『文藝對話』に於ける意味を有つと解すべきであるが、ノ 詩であると言つてゐるのは(『同上』)またシュレーゲルの謂ふ自然詩の意味に從つてゐるのである。 ワ ノブーリスは で彼が『マイステル』 1 リスのこの場合の自然詩は狭義に、自然描寫の美といふほどの意に解してよいと思はれる。 しかしノヴーリスが別の箇所で、戰爭を詩の作用であると言ひ、(『オフテルディ) 愛を最 高の自然 「この書のうちには浪漫的なもの、また自然詩も、不可思議なものも失はれてゐる」(『斷章』)と に外界の敍述、敍景の文の乏しいことを難じてゐることからも、 さう見るのが妥當で 他 のところ

値があるのである。それには専門的、職業的詩人が書齋で腦漿を絞つて拵へ上げた文化詩(Kulturdichtung) 即ち詩を語つてゐる。民謠はかかる素朴な、未だ合理化されない根源的感情の地盤から生れたといふことによつて價 論とを比較してみるのが捷徑であらう。前者には感情體驗の直接性と力强さが溢れてゐるのに對して、 られない真實感がある。いはば自然がそこで歌つてゐるのである。「一民族が未開で素朴であればあるほど、その歌 ためには、 語も素朴であり、 の場合精々氣の利いた技巧の冴えを感ぜしめるにすぎない。それには感傷はあつても、決して情熱 に作られた死んだ文字の詩」でなく、 ルデルによれば、人間でいへば小見、民族でいへば自然民族は逞しい想像を自由に働かせ、純粹な感情の言語、 へば多くのすぐれたものを含む八重山群島の民謡のごとき)と何々小唄、何々主題歌と稱せられる當代の流行歌 吾邦の萬葉の歌と後代の題詠歌とを對照してみるのもよいが、また今も現に漁 即ち一層生氣に富み、自由で、感性的で、 直接な感情の流露する生きた詩である。ヘルデルのこの見解を端的に會得する 抒情的で、 行動的である筈である。」それは「紙のため 村山里に残る古來の民語 に高まつて來 には見

ない煽情の饒舌があるのみである。

な效績が認められるのである。 して强調し、文藝思想に價值轉換を行つて青年ゲーテその他に甚深の影響を與へた。そこに彼の先驅者としての大き ルデルは從來多く顧みられなかつた民謠の缺陷と見なされたその無技巧、素樸、單純の諸性質を却てその長所と

K デ てよいであらう。 在し得るだらうか」とも言つてゐる。時としてシュレゲー ルの自然詩の概念へ 著しい接近を思はせるところ といふ語を用ひ、「神の詩」の語も見え、「神自身が世界創造に於て吾々に表現したものより美しい詩が存 に與へるものは、 0 ルが自然詩をいかに尊重したかは前に述べたが、彼の自然詩の理念を把握するのに最も多くの照明を吾々 あるのは注目すべきである。 .は、眞の自然詩を「神の自然の美しき解釋者」と呼んでゐる箇所がある。 また自然詩人 (Naturdichter) Naturdichtung の思想を文學論に重要な契機としてとり入れた最初の人はヘルデルであると見 『ヘブライ文學の精神について』("Vom Geist der ebräischen Poesie.")であらう。そと (ハーマンの精神がこの思想の成熟に酵母として作用してゐることは疑はれない)へル

民族の聲として生れたものである。從つてそれは民間詩(Volkspoesie)と同じものを指してゐる。 とく自然に生れた傳說、 要するに、ヘルデルに從へば、歴史と詩とが未だ分たれない民族の原初狀態にあつて、恰も自然現象のご 神話が詩の原型であり自然詩なのである。個人の恣意の制作でなく、民族の魂から

ルデルのいふ自然詩が蘘に述べたシ"レーゲルの 自然詩と同一概念でないことは、 この上の絮説を要せずして明

耀

逸

壓

研

平に連なり、 できよう。 また前者の自然詩は詩のうちに自然を見たものであるが、後者の自然詩は自然のうちに詩を見てゐるともいふことが かであらう。 くも文學の一つの種類として見てゐるのに對し、 兩者はかく異なつたものであるが、 ヘルデルは、この語を彼自身の意味で使用する時、文學的意識をもつて制作された詩に對置し、ともが 同じ方向を目差してゐるのである。 しかもいづれの意味に於ても自然詩を强調する精神態度は、 シュレーゲルの自然詩は文學そのものに對立するものである。 一つの地 或は

自然詩についてシュレーゲルは前掲の部分についで次のやうに語りつづける。

に何物も有たない。さうして吾々もまたその神の詩の一部であり、 「人間である吾々すべては、常に且つ永久に、一切の活動、一切の喜びの對象、素材として、神の一つの作詩以外 その花である。」

作品と人間の藝術作品とが比較されてゐる。詩人の作品は到底神の作品と同列に置かるべきものでないが、 の無限 5 てゐるか、といふ程度に差等があるのである。 點でその根源である神の作品の影を映してゐないものはない。ただそれが原像に近く迫つてゐるか、 ここで自然詩は「神の作詩」と呼ばれ、吾々人間はそれに對して全體に對する部分の關係に立つのである。すなは 人間の地上の管みも自然詩の一部と見なされるのである。さうして後段の「藝術のあらゆる神聖な所作は、 の所作い 永久に自己を形成する藝術品の、ただ仄かに似通ふ模寫にすぎない」といふ言葉によつて、 はるかに隔たつ 神の藝術 何等かの 世界

あるが、かういふ思想は特殊の考へ方から出てゐるのでなく、 かく見て行くと、 F・シュレーゲルの自然詩といふものは詩の名を帯びてゐるところに事新しさを感ぜしめるので 神秘主義その他の汎神論的思想傾向に脈絡が見られ、

『宗教講話』との類縁を指摘してゐる。 同時代の自然哲學者等の言説に類比を見出すことが出來るのである。 (Walzel: Grenzen von Poesie und Unpoesie.) 現にダルツェルはシュライエルマッヘルの

個 塾對話』の緒言は、『宗教講話』の根本見解と吻合して、宗教を詩に置き換へたやうなものであることは、この兩つ 0 3 シュライェルマッヘルが宗教に就いて言つたことをシュレーゲルは藝術に就いて適用してゐると見られるのである。『文 作品を照合すればたやすく知られるところである。グンドルフがこの『緒言』に浪漫主義の三根本概念、 この類似を仔細に追究して行くことはこの小論の意圖にとつてさまで重要なことでないから省略する。 のもこの類縁に注目してゐるのである。 (Gundolf:Romantiker.) 協同性が結び付けられてゐると言ひ、この三概念に吾々はシュライエルマッヘルの宗教講話に於て再會すると言 要するに

では何れが受領者であり、何れが贈與者であるかを逮かに決し得られないやうな相互の交流、啓養があつた。ここに ばならないであらう。 この歴史上稀有な時代に於て、一人の言ふところが他の言ふところと深い連繫をもつことはむしろ當然である。そこ 卓越した人材が夥しく輩出して親しく交はり、共に思索し、(symphilosophieren)共に偉大なるものを創成した ーゲルとシュライエルマ。ヘルの頻緣を見るものは、同様にまた前者とシェリングとの思想的近似を認めなけれ

せしめられるのである。「Poesic は藝術に於て、學ばれ得ないもの、練習やその他の方法によつて獲られないもの、 と同じものでなく、 シ"リングの藝術哲學に於て、Kunstと區別されて用ひられてゐる Poesieの概念は、シュレーゲルの謂 それは人間の藝術活動に於ける無意識的、 創造的な要素として意識的。技術的な Naturpoesie

術制作とは無關係として考へられるシュレーゲルの Naturpoesie と同じものではあり得ないのである。 作することが出來るのである。」 (Schelling: System des transzendentalen Idealismus, VI. Abschnitt.) 無益の問であり、 ただ自然の恩惠によつて天賦のものであり得るものである。 この兩者の何れも他のものなくしては何等の價値がない。 Poesie と Kunst と何れが優位を占めるかといふことは この兩 つが集まつてのみ最高のものを制 それ故に、 藝

のといひ得るには、あまりに密接な聯闘を有つてゐるのである。 しかし更に一層深く立ち入つて考察すれば、この雨つのものは同一のものを指してゐないとしても、 また無縁のも

詩がい に認められてゐるのだらうか。 術 の遊び 世界の到るところに見られるシュレーゲルの「自然の詩」が「言葉の詩」を成り立たしめる根源と見られ、 かに藝術詩に受けとられてその模寫となるのであらうか。この問ひに對する答のうちに詩人の使命が開 (言葉の詩) は世界の無限の遊び 言ひ換へれば、 (自然の詩) 自然詩は藝術詩といかなる媒介によつて結ばれるのであらうか。 の模寫と言はれるには、 一たいいかなる實際の連鎖 がその間 示され また藝 自然

覺である。自然詩の現象が單なる自然現象でなく詩であるためには、 だんに、 1 したものが詩人である。 ij 自然詩は自然の裡に存在するものであるが、それを感得するには特別の器官を要する。この器官の常人よりも發達 ス 惜しむことなく「詩」をあらゆるものの上に瀰漫せしめてゐる。これを「詩」として受容するの 「自然器官 (Naturorgan) 浪漫主義の文藝思想に於て、詩人または天才はかかる器官の使用者として尊重される。ノヴ を有しないものは、 自然を捕捉することが出來ない。」 詩人のうちにこれに感應するもの 自然は がなくては は詩人の ふん

場合にも發表の時の先後によつて一方的の影響を推斷する誤を犯してはならない。シ"リングの『先驗的觀念論の體 た「吾々が自然と呼ぶものは不可思議な秘密の書物のうちに隱れてゐる一篇の詩である」と言ふのも、 には目に見えぬ精神がある。それが Poesieである」と言ふのも、制作に於て技術の外にかかる Poesieを認めてゐる うちに搖曳するものがシェリングの謂ふ Poesie であると見ることができる。 シュレーゲルが「あらゆる制作品のうち み完全に把握され得るのであるから、 ならぬ。 彼 越えて、 のである。ことにシュレーゲルのいふ Poesie と、ショリングのいふ Poesie との接觸面がある。 のやうでなければ、吾々はどうして太陽を見ることができよう」ゲーテ)この働きの詩人の側にあつて、延いて作品 (Ricarda Huch) の精神の力は强く周圍に影響を與へ、「山間に俄に强くむし暑く吹き起る南風のやうに浪漫派のうちへ働いた」 「先生であると同時に弟子であつた」と見なければならないだらう。 の完成されたのは『文藝對話』の後の事に属するが、シ"リングは旣に『對話』以前にシ"レーゲル等と交遊し、 或はむしろ自然詩を詩たらしめる働きがなくてはならぬ。 自然を神的な藝術作品と觀てゐるのである。 のである。彼等はむしろ『對話』に描かれてゐる一群のごとく、五に切磋し、啓發し合ひ、各の人 自然詩を捉へる詩人のこの働きはまた詩の働きでなければならぬ。 シュレーゲルの「神の詩」と謂ふのと一般である。 しかるに或物はそれと等質のものを有つときにの さらにシェリングがま 單なる譬喩を つ眼 が太陽

7 ることはよいとしても、 ヴル ゐるのは不可解である。 ツ"ルが『對話』のシュレーゲルの思想にシ"リングよりもシュライエルマッヘルとの 自然の無意識な詩を認めてゐることはショッング的でないといふ 共通を 意味のことを言つ 重視してゐ から

猴

墨

國民文學に回生の活を入れる警醒であつたのである。 域にあつて、自然詩、民謡を提唱することは、失はれたものへの空しき哀惜ではなく、生氣の萎靡を來たした獨逸の くるのであるから、 可能を信じてゐた。 てねたのでない。 の詩人の使命に就いて今少しく立ち入つて解説を加へ、浪漫家によつて力説される「天才」の問題を考へてみたい。 る文藝思想を懐抱してゐたことはいふまでもない。この文藝思想を全般に亙つて精しく述べるいとまはないが、 いふ考を前提としてゐる。この思想は一見文化悲觀說のごとき觀を呈するが、しかしヘルデルは文化の前途に絕望し 工 以上、 ル マッヘル にいふヘルデルの自然詩、或はまた民謡の尊重は、當然文化の歴史の發達には、頹廢的な現象が隨伴して起ると F シェリングとの聯闘を見たのであるが、この人々はその精神にひとしく浪漫主義的傾向を有ち、 彼の言語年齢説に於ても知られるやうに、老い行く文化に若々しい活力を與へて回春を圖 ーゲルの さうして文化の衰退は、 更新の途は再び自然を取戻し、根源に復歸することを通じて行はるべきであるとした。 『文藝對話』の『緒言』 自然を離れることによつて、 に書かれた「自然詩」の概念を説き、それとヘルデル、 その根源から背くことによつて、 現はれて ることの 相通ず 上述

可能である 力 この文學の甦生がいかにして爲されるか。失はれた自然性を再び與へて文學に新生命を注入することは何によつて かる天才の範例として感激を以て迎へられたのであつた。 天才がこれを能くする。 ここに天才が重い任務を荷つて登場してくる。 さうしてシェイクスピアこそ

プ に讃美したものは何よりもその自然の眞質に迫る力であつた。「シ"イクスピアは最も偉大な巨匠である。 12 デルは、 1 1マ ンの天才説に於て天才の要素として掲げられた自然的な原本性を重視した。 彼がシェイクスピ それは正

テもまたシ"イクスピアの「疾風怒濤」的・ハーマン、ヘルデル的把握の圏内にあつた。この場合天才の讃美が何よ 嘆の情を披瀝したが、彼も「私は叫ぶ、自然!自然!シ"イクスピアの人間のやうにそれほど自然であるものはない」 化を負うた青年ゲーテもまたシ"イクスピアに傾倒し「私が讀んだ彼の作の第一頁は一生涯私を彼の擒とした。 りもその自然性に向けられたことを認めなければならないのである。 アの因襲を打破した無比の獨創性、根元的な情熱の溢れる自然性にかかつてゐたことは疑を容れない。すなはちゲー と言つてゐる。「余の今日あるは君のおかげである」といふ彼の感謝は少くとも初期にあつては主としてシ"イクスピ して最初の劇を讀了したとき、 に彼がただ、さろして常に、自然の僕であるからである」と言つてゐる。 生來の盲人が奇蹟の手によつて或刹那に視力を與へられたやうに立つてゐた」と感 ハーマン、 ヘルデル の思想に支配的 な感

て少からぬ禍をも文學にもたらしたとはいへ、この天才の理念は後に本來の浪漫主義の文藝思想にも重要な契機とし 濁つた誤れる天才心醉(シェリングのいふ天才について消極面をのみ認める天才感激)が無拘束な放縦と結びつけられ 七七〇年代の若き世代の文學革新の運動はかく天才の理念を新鮮な意味を盛つて導入した。たとへその反面には

て受けつがれ、豊かな質りを見ることになつたのである。

的にはたらくのである。天才とはこの力を意識的に自由にはたらかせる能力に外ならない。 する特権ではない。 よつても知られることである。この魔術のはたらきは藝術的天才に於て典型的に示される。 初期浪漫主義に於て生産的な想像力が世界原理に高められてゐることはノヴーリスの魔術的觀念論 いかなる人もこの魔術の力を内に潜めてるないものはないのであるが、 しかしそれは天才の獨占 天才にあつてそれ ノグーリスが の魔術 「天才性な の思想に

義の知性は「疾風怒濤」が天才に捧げた酒神頌歌の代りに、このやうな天才の論理を提示してその意義を高唱しよう とした。浪漫主義は天才をかく見ることによつて天才を吾々の問題たらしめたのである。 天才である」と言ふのは、この事を指してゐるのである。 くしては吾々すべては一般に存在しない。 むしろ天才を異常な、變態のものと見ないことによつて、却つてその威嚴と品位を高めるものである。浪漫主 天才は一切の事 この天才觀は決して天才を凡庸の世界に引下げることでは に必要である。 しかし普通天才と呼ばれるものは、 天才の

才の思惟が我等のそれと本質を同じくしてゐることを説いた。 ブ する感激を高める所以であると言つてゐる。 ノの心理學上から觀た天才の考察は、 (Franz Brentano: Das Genie. 天才と凡才との本質的な差別を認めず、 さうしてこれを知ることが却つて吾々の天才 天才の創造、 天

6 者といふばかりでなく、質に自然の啓示に参與するといふ意味によつて至上の價値を獲るのである。 しかし自然の詩はそれ自身では詩としての機用を發揮することができず、天才を待つて詩として現象するのであるか 藝術詩となる。この場合自然は藝術の素材といふよりも、むしろ藝術を成立たしめる根源と見られてゐるのである。 によつて媒介されることになる。すなはち、自然詩が天才(詩人)の高度の感受力に受容され、意識的な技巧を經 F 天才の意義は極めて高いものと言はなくてはならぬ。それはただ普通にいふ藝術 ・シ"レーゲルのいふ自然詩と普通に詩と呼ばれる藝術作品とはかくして自然詩のすぐれた把握者としての天才 の制作活動に於ける技術的卓越

かくて天才の制作である「藝術は哲學の唯一の、真實にして永久の機闘であり、哲學が外面的に敍述し得ないもの、 しかし天才の理念をその哲學體系にとり入れて、世界原理として最も高い意味を賦與したのはシ"リ

學に對すると同じものであつて、すなはち、決して客觀的とならず、しかも凡ゆる客觀的なものの原因である最高 綜合である」)完全なものは天才によつてのみ實現されるのであるから、それ故に「天才は美學にとつて、自我が哲 根本的に結合して、いはば一つの焰として燃えるのである。」(Schelling: System des transzendentalen Idealismus.) 自然と歴史とに分離してゐるもの、生活と行爲に於て、また思惟に於ては永久に身を隱さねばならぬものが、 證明する證券である。藝術は哲學者に至聖のものを示すから、 すなはち行爲と生産に於ける無意識的なものと、並びにそれと意識的なものとの根源的同一とを、常に絶えず薪たに さうしてかく無意識的なもの、(Poesie)と意識的なもの、(Kunst)とを綜合した(「藝術作品の根本性格は自然と自由 實在のものである」の言葉に照應を見出してゐる。かくして初期浪漫主義の世界像に於て詩、天才、或はまた生產的 絕對的實在者である。」(同上)とも言はれるのである。 な想像力が、中心的な地位を占めるに至つたのである。 シェリングのこの言葉はまたノヴーリスの その故に哲學者にとつて最高のものである。 「詩は純粹絕對に 永遠に

狹義にただ美學的にのみ 解すべきで ないことは、 今まで述べたところ によつて明かで あらう。 (romantisieren) 浪漫主義の根本傾向は、宇宙を詩化し、或はまた詩を宇宙化することに外ならないのである。 獨逸浪漫主義の本質を詩精神の發揚の面から認めることもできると思ふ。しかしての場合、 世界を浪漫化する 詩を

生産として、創造の方面から見てゐることが、その顯著な特色である。さらして想像作用はノゾ つて世界構成の原理に高められてゐるのであるが、これと平行して彼は愛を世界の一切を結合する原理とし 啓蒙思想には於て詩は作られたものとして效果の方面から見られたが、浪漫主義はこれを天才の想像力の ーリスによ

豱

て强調した。しかも愛を「最高の自然詩」と言つてゐることは深い意義がある。 文學のうちに、到るところに可視的また不可視的に漂はなければならぬ」と言つてゐる。一切を生む愛の字 宙的意義を學揚する思想にスピノーザの「能産的自然」の思想との聯闢をいふものがあるが、直接には先づ の精神を高唱し、「文學に於ける一切の感動の源泉であり、魂であるものは愛である。愛の精神が浪漫的の テルホイスとの脈絡を考へるべきであらう。 次にこの闘係について若干の考察を試みたいと思ふ。 F・シュレ ーゲルもまた愛

ることは、 しかし今とこにこの斷片的考察を結んで次の題目に移る前に、 恐らくことで扱った問題に對して許しがたい怠慢であるといふべきであらう。 ヷッケンローデルに一言をも 費すことなく素通りす

品であつた。
デッケンローデルは獨逸浪漫主義の魂であつたといひ得るであらう。 る た ル合作の『フランツ・ 1 しかも根ぶかい影響を傳へた。フリードリヒ・シュレーゲルの浪漫主義文學理論の展開には、 が、彼の敬虔で、純真な心情はティークに深い感動を與へ、またティークを通じて初期浪漫派の同人に微妙な、 2 ם テ、 ヴァケンローデルはノヴーリスよりも短命で、不幸にしてその文

學的才能を十分に 伸ばし得ないで終つた 浪漫主義の文學論が明かな形をとる以前にヷッケンローデルは無意識に浪漫文學を實現してゐたのであ 彼の作品に比較すればノダーリスの『オフテルディンゲン』ははるかに意識的、 1 デ フィヒテ、 ルの作品の薫染に負うことの大きかつた點も見逃すわけに行かない。彼はティーク、 シュライエルマッヘル、シェリング等の影響乃至協同に待つところ多かつたが、さらにヷッケ シュテルンバルトのさすらひ』をセルヴンテス以後最 初の浪漫的な書であると讃美し 意圖的な浪漫主義的作 ヘルデル、ゲ

TA は彼にあつては神聖なものとして崇められ、藝術愛は彼によつて宗教的情熱に高められ、宗教と藝術との合一境が類 教畫)の價値を新しき眼で發見し顯揚したこと、同時にまた藝術の宗教としての意義を强調したことであつた。 なき敬虔の念をもつて語られてゐるのである。 ヴッケンローデルの作品に見られる新しい點は、宗教藝術(例へばラファエロ、 フランチェスコ、 レオナルド等の宗

力に就いて』の章に ティークとの合作に成る彼の『藝術を愛する一修道僧の眞情の披瀝』の中の (の筆になつてゐることは略ぼ證明されてゐる) 次の言葉が見出される。 『二つの不可思議な言語と その神秘な

すぎない。 すのは神だけである。他の一つを話すのは、人間のうちで神が香油で清めて吾が愛見とした。選ばれた少數の人々に を搖り動かす。さうして吾々の內の凡ての神經とすべての血の滴の中へ押し寄せる。この不可思議な言語の一つを話 が僣越でなければ)人間にとつて爲し得る限り、把握し理會することを許されたのである。この二つの言語は、言葉 助けによるとは全く違つた道を通つて吾々の内心に入つてくる。この言葉はいきなり不思議な仕方で吾々の全存在 「しかし私は二つの不可思議な言語を知つてゐる。その言語で神は人間に天上の事物の凡ゆる威力を、へからいふの 私のここに言ふのは自然と藝術とである。」

それはシ"リングが詩に就いて Kunst と區別した Poesie に該當するものである。 40 あるが、しかし同時にこの「不思議な言語」は、色彩の配合とか、構圖から生れる、吾々の眼に訴へる感覺的要素を ここでいはれる藝術とは言語藝術でなく、 のではなく、そこに漂ふ超感性的な、吾々の心に染み入るものを指してゐることもまた疑ふ餘地がない。それ故、 造形藝術(主として繪畫)であることは、その前後に照らしても明かで 從つてまたヷッケンローデルの言

る浪漫主義の花々しい思想は、「藝術を愛する一脩道僧」の名に隱れた無名の一青年の純潔なつつましい魂に、 ふところを言語藝術に於ける Poesie にそのまま移しても彼の思想の限目を失却することはないのである。 に限りなき法悦として體驗されたのであつた。 藝術の前に拜跪するこのひたむきの歸依は浪漫主義文學論の汎詩論的傾向と繋がつてゐる。 世界の詩化ともいはれ すで

彼とともに考へ、ともに夢み、 ンベ 覺醒といふべき深い感激が認められる。 しかしこれについてはここでは彼の作に示される藝術の古都ニュル 口 「想した次の言葉を想ひ起せば十分であらう。 ヴッケンローデルの作品の根本感情としては、

藝術に對する絕對歸依の外に、

祖國への回歸、 ルクの讃美、 獨逸中世の畫人アルブレヒト・デューレルへの傾倒を指示することにとどめる。 また當時 ともに詩作し、 同行の朋として所信を同じくしたティークがその頃の心境を 民族意識の

それは人々に識られないで嘲笑されてゐるが、これを私は再び學揚して『シュテルンバルト』に於て表現し 「私にとつて祖國が第一であり、最高であつた。祖國の生活と藝術、それに示される單純で真摯な態度、

系譜の中斷を認むべきではない。これに就いてもまた續篇のうちに言及するつもりである。

(一六、一一) な收穫を見たのであるが、往々にして説かれるやうに、シュレーゲル、 て初めて浪漫的な作品に於て輝かされたのである。この藝術上の獨逸主義の思想は後期浪漫派に至つて豊穣 藝術に於けるこの祖國感情の高揚はクロプシュトック、ヘルデルの遺産であつたが、ヴッケシロ ノザーリス等の初期浪漫派に於てこの ーデル によつ